

# 第41回 岡倉天心記念 がん哲学外来 巣鴨カフェ「桜」

令和4年 11月12日

言葉の处方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 PG4

どうせ人は死ぬのだから

死なない人はいません。いつかは死ぬ。

この当たり前のことを謙虚に胸に刻めば、むしろ平静になれます。

私は病理学者として、若いときから人の死を起点に物事と向き合ってきました。病理解剖に従事した者ならではの生命のむなしさを痛感するがゆえに、いのちの真の意義の探求が始まったと思っています。

しかし、若輩者のころは、いやなんやこんな言動は絶対に許せないとと思う横柄な人に会うたびに、「どうせこの人も死ぬんだ」と自分に言い聞かせて、そのいやな気分を乗りきってきました。もちろん、そうよつちゅうあることではありませんでしたが、今思えば謙虚さに欠ける時代でした。

現在、私は医療・福祉を専攻する学生の選択授業「死生学概論」という講義を行っています。「死生学」とは、自分の存在意義と向き合い、われわれ医療・福祉に従事する者に「心を引き締める」ことを要求するものです。「死と生」という両極の存在は、静思へと導き、謙虚さと奥ゆかしさを身につけさせてくれるものだと学生たちに伝えています。古くから不老不死は、人類に共通する野望でした。洋の東西を問わず、不老不死の妙薬を求めて、人々は冒險を繰り広げました。

現代では、「いつまでも若く、健康でありたい」という願いが再生医療を進歩させています。

しかし、私は「人は遅かれ早かれ死ぬ」という事実を冷静に自分に言い聞かせることも、大切なことだと思っています。生命体としての人間は、いつかは 老い、死ぬのであり、どんなに富を積もうが、徳を積もうが、死は逃れられないのです。

がんであろうが脳出血、心疾患、老衰であろうが、人間の死亡率は間違いなく100パーセントです。誰もがいつかは必ず死にます。そして、死んだらしょせん「畳一枚ほどの墓場」と内村鑑三は言いましたが、私に言わせれば、「座布団一枚ほどの墓場」となるにすぎません。

こうした諦念を持つと、自分のために物質的な幸せ、お金や地位や名誉、肩書に執着しなくともいい、生にしがみつくこともない、という分別が生まれてきます。それはまるで、ずっと背負ってきた重い荷物を下ろすような軽やかさを味わうに等しいでしょう。もうひとつ、死生観から学ぶことがあります。もし、高い理想を掲げているあなたなら、その理想をあらためて思い浮かべてください。崇高であればあるほど、それは一代でそう簡単に達成できるものではないでしょう。でも、「自分は死んでも、自分のビジョンは100年後に花開けばいい」と思えたらどうでしょう。

そう腹が据わると、理想もより大きく持てるのではないかでしょうか。そして、そのためには今、自分は何をなすべきか、が見えてくる。欲張らず、些末なことに一喜一憂しなくなります。理想、ビジョンは時間の制約を受けないものなのですから。

「どうせ人は死ぬのだから」

がん哲学外来で、家族や職場の人間関係に嫌気がさして思いの大をぶつける患者さんに、この言葉を贈ることがあります。「日常の職場や家族のいやなことはどうでもよくなるでしょう、どうせ人は死ぬと思えば。それに30秒下を向いて黙ってお茶を飲んでいてごらんなさい。いやな人は自分の前から去って行くものですよ」

しかし、いやなことはウエルカムだとも考えられます。がん哲学外来では30秒どころか30分という沈黙に耐えられることが求められます。そんなとき、私は自分の品性のための訓練だと思っています。訓練に協力してくれているといえば、いやなことも沈黙もまた楽し、ではありませんか。



次回 12月10日(土)

おんびつと訪問看護ステーション

です